

高 等 学 校

平成23年度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	3
III	研究の仮説	5
IV	研究の方法	6
V	研究の内容	7
VI	研究の成果	23
VII	今後の課題	24

研究主題

思考力・判断力・表現力を高める 「総合的な学習の時間」における指導の工夫 ～各教科等で学んだ基礎的・基本的な知識・技能の活用を通して～

I 研究主題設定の理由

平成21年3月、高等学校学習指導要領の改訂が告示され、「総合的な学習の時間」は平成22年度から先行実施されている。今回の学習指導要領改訂では、改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、現在の生徒に対する課題への対応の視点から基礎的・基本的な知識・技能の習得を基盤とした思考力・判断力・表現力の育成が重要視されている。また、平成16年度におけるPISAの学習到達度調査結果等から読解力の向上が課題とされ、学習指導要領では「言語活動の充実」が掲げられ、「総合的な学習の時間」においても「問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること」と明記されている。「総合的な学習の時間」は、変化の激しい社会に対して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることをねらいとすることから、「知識基盤社会」の時代においては思考力・判断力・表現力等の育成や言語活動の充実が求められ、ますます重要な役割を果たすものである。

今回の改訂においては、各学校で生徒の思考力・判断力・表現力等を確実に育むために、まず、各教科の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能を習得させ、その上で、観察・実験やレポートの作成といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させるとともに、その基盤となる言語に関する能力の育成のために、各教科等において記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があるとしている。「総合的な学習の時間」では、その取組の上に各教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習、探究的な活動を充実させることが重要である。各教科等における思考力・判断力・表現力を育成する活動は次のような学習活動がある。(平成20年1月中央教育審議会答申)

- 1 体験から感じとったことを表現する。
- 2 事実を正確に理解し伝達する。
- 3 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。
- 4 情報を分析・評価し、論述する。
- 5 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。
- 6 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

「総合的な学習の時間」では、これらの活動を通して身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、円滑な連携を図る観点から、「総合的な学習の時間」におけるねらいや育てたい力を明確にすることが求められる。

そこでまず本部会では、各教科等における思考力・判断力・表現力の育成の上に立って、「総合的な学習の時間」における思考力・判断力・表現力を考え、次のように定義した。

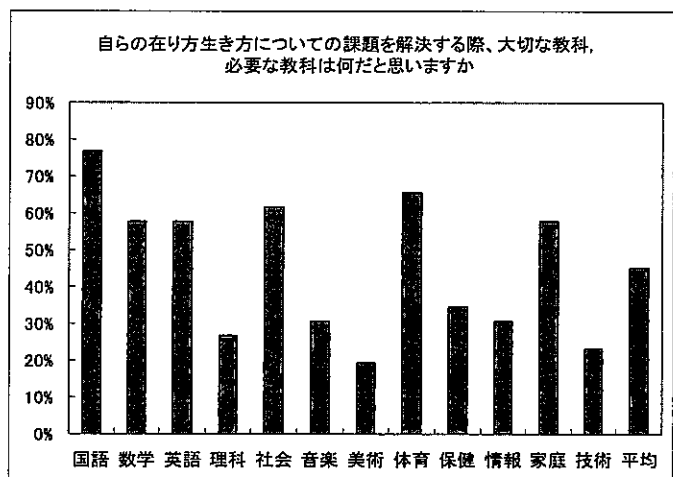
- 1 思考力・・・自ら探究し、設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的

に考える力

- 2 判断力・・・自ら課題解決に向けて多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用する力
- 3 表現力・・・選択した解決方法を基に、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力

現在、各学校では思考力・判断力・表現力の育成を目指して創意工夫がなされているが、中央教育審議会答申（平成20年1月）における課題として「学校教育全体で思考力・判断力・表現力等を育成するための各教科と『総合的な学習の時間』との適切な役割分担と連携が必ずしも十分に図れていない」との指摘がなされている。

本部会では、事例研究を実施する前に「自らの在り方生き方についての課題を解決する際、大切な教科、必要な教科は何だと思いますか。該当する教科全てを選択して下さい」というアンケートを生徒に実施した。アンケートの結果によると、選択した教科が70%を超える教科がある一方で、教科全体を平均すると50%に至っていない現状があった。これは、生徒が各教科等で学んだ学習内容を自己の在り方生き方について考える「総合的な学習の時間」に活用できていない現状があると考えられる。



国語 数学 英語 理科 社会 音楽 美術 体育 保健 情報 家庭 技術 平均

先に記述した思考力・判断力・表現力のそれぞれに照らして考えると、思考力では解決方法を創意工夫する段階で、判断力では多様な情報を分析・評価して事実を正確に理解する段階で、また、表現力では解決方法を基に自らの意図や考えをまとめたり他者に伝えたりする段階で、各教科等で学んだ内容や経験が生かされていないと考えられる。その結果、各教科等における基礎的・基本的な学習内容が、「総合的な学習の時間」に総合的・横断的に活用されておらず、自らの在り方生き方につながる課題解決に至っていないと考えた。

また、先に述べたPISA調査の結果からは、学力の重要な要素である学習意欲やねばり強く課題に取り組む態度に個人差が広がっているといった課題が認められる。平成16年度文部科学省委嘱研究報告書「学習内容と日常生活との関連性の研究」によると、生徒の学習意欲の低下は、生徒が「その学習が自分にとって必要がない、関係がない」と感じる必要がある要因の一つとなっているとしている。すなわち、学習意欲は、生徒の「内的必要感」の欠如や教材と生徒の内面との「内的関係性」の薄さに原因があると考えられる。学習内容と現実世界の事象とは、もともと有機的につながっているものであるが、現実世界の事象を教材化する場合、その有機的な関連が外れてしまうことが多い。それは、現実世界の事象を「全体」とすると、教材化したものは「部分」になるが、細分化された「部分」からは全体構造が見えなくなってしまい、生徒は「全体」と「部分」とのつながりを意識できなくなって「内的

関係性」が失われてしまうからである。生徒が今行っている学習の意味をつかむためには、「全体」と「部分」のつながりをもう一度付ける、いわば「橋渡しをする」ような「内的必要感」と「内的関係性」を考慮した指導の在り方が重要になる。

学習指導要領の「総合的な学習の時間」の「指導計画の作成と内容の取扱い」には「各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活に生かし、それらが総合的に働くようにすること」とされている。これは、各教科等で別々に身に付けた知識や技能（「部分」）をつながりのあるものとして組織し直し、改めて現実の生活に関わる学習（「全体」）において活用し、それらが連動して機能する（「橋渡しをする」）ようにすることである。身に付けた知識や技能は、当初学んだ場面とは異なる新たな場面や状況で活用されることによって、一層生きて働くようになり、「内的必要感」と「内的関係性」が増し、生徒の学習意欲の向上につながる。

本部会では、「総合的な学習の時間」の中で、各教科等における基礎的・基本的な知識・技能を活用しながら、課題を見付け、目的に応じて情報を収集し、その整理・分析を行い、言語によるまとめや表現をしたり、生徒相互がコミュニケーションを図ったり、振り返ったりするなどの学習活動の研究を行う。このような学習活動は、各教科等と「総合的な学習の時間」とを結び付けて互いに補い合い、支え合うものになり、生徒の学習意欲の向上につながる。さらにこれらの学習活動の結果や振り返りを各教科等に結び付けることによって、当該学年はもとよりその後の学年における各教科等の学習を動機付けたり意欲を高めたりすることができ、ねばり強く課題に取り組むことにつながられる。

これらの結果として、生徒の思考力・判断力・表現力を高めるとともに、各教科等における基礎的・基本的な知識・技能の習得にも資するなど教科等と一体となって生徒の力を伸ばすものである。

以上のことから高等学校「総合的な学習の時間」部会の主題を「思考力・判断力・表現力を高める『総合的な学習の時間』における指導の工夫～各教科等で学んだ基礎的・基本的な知識・技能の活用を通して～」と設定した。

Ⅱ 研究の視点

「総合的な学習の時間」は意図的・計画的に各教科等の横断的・総合的な内容として実施されるべきであるが、現在、学校によっては、体験活動を行うこと自体が目標になってしまったり、各学校の取組の実態に差があったりする等の課題が見られると、学習指導要領解説でも指摘している。

体験活動を単独の学習で終わらせるのではなく、体験活動を問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付け、生徒の体験活動を一層充実したものとさせ、互いに教え合い学び合う活動や地域の人との交流活動など他者と協同して課題を解決しようとする学習活動に組み込むことが大切である。体験・探究活動においては、生徒が自ら課題を見付ける思考力、主体的に判断する判断力、よりよく課題を解決しようとする表現力などを育成するように、意図的・計画的に体験・探究活動を位置付けることによって、「総合的な学習の時間」の内容、育てよ

うとする資質や能力及び態度などが確実に身に付くと考えられる。

また、体験したことや収集した情報を、言語により分析したりまとめたりすることは、問題の解決や探究活動の過程において重要なことである。言語により分析したことを文章やレポートにまとめたりする「言語活動」を充実させることは、それまでの学習活動を振り返り、体験したことや収集した情報と既存の知識とを関連させ、自分の考えとして整理したり、思考力を高めることにつながる。加えて、文章による記述（レポート等）は、横断的・総合的な学習や探究的な活動を行った過程や結果、それらについての考察などを論理的に記述したものであることが重要であり、問題の解決や探究の過程を通すことで、書く目的が明確になり、その内実も豊かになると期待できる。

各学校の取組の実態の差を解消するためには、教科において、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得やその活用を図るための時間を確保することを前提に、「総合的な学習の時間」と各教科等とのそれぞれの役割を明確にし、これらの円滑な連携を図る観点から、学習指導要領第4章第2にあるように、「総合的な学習の時間」におけるねらいや育てたい力を各学校で明確にする必要がある。

また、「総合的な学習の時間」においては、生徒が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断するなど、生徒の主体性や興味・関心を十分に生かすことが望まれるが、必要な指導をためらい、教育的な効果が十分に上がらない例があったり、逆に指導事項を必要以上に教え過ぎてしまい、生徒が自ら学ぶことを妨げてしまう例があったりするように、支援者としての教師の役割が誤解されたことも見られた。この反省に立って、教師は、各学校で定めた「総合的な学習の時間」の目標及び内容に基づいて、生徒が望まれる学習状況に達しているかを継続的に評価しながら、より質の高い学習状況に向けて自立的な学習が行われるよう必要な手立てを講じなければならない。さらに、「総合的な学習の時間」は、各教科等の基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動と各教科等を横断した課題解決的な学習や探究的な学習とを関連させながら、各教科等の知識・技能の確実な定着に結び付ける必要がある。そのために教師は、各学校で行う「総合的な学習の時間」の学習内容が、どの教科の学習内容と関連するのを見極め、適切な指導をする必要がある。

これらのことを受けて、本研究では次の三つの指導方法の在り方について、指導の工夫や方策等について明らかにする。

- 自ら探究し、設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的に考える力を育成する指導の在り方（思考力の育成）
- 自ら課題解決に向けて多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用する力を育成する指導の在り方（判断力の育成）
- 選択した解決方法をもとに、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力を育成する指導の在り方（表現力の育成）

具体的には次の四つの指導の工夫について提示し、その効果を検証する。

- 1 教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や探究的な活動を行うための指導や教材作成の工夫

- 2 生徒が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断していくための教師の支援の工夫
- 3 体験したことや収集した情報を、言語により分析したりまとめたりする指導の工夫
- 4 学習活動をしていく中で、どのような力が身に付いたかを検証するための自己評価の方法の工夫

Ⅲ 研究の仮説

現在、生徒にとって、各教科・科目の学習で得られる知識・技能は、現実社会の諸問題と
かい離しているという印象が強く、それが一つの原因となって、学習意欲の低下が起こつて
いる。また、各教科・科目のそれぞれの知識・技能が他の教科・科目の知識・技能と関連付
けされていないという一面もある。これらの点を踏まえて、平成20年1月の中央教育審議
会答申では、『総合的な学習の時間』のねらいについては、子どもにとっての学ぶ意義や目
的意識を明確にするため、日常生活における課題を発見し解決しようとするなど、実社会や
実生活との関わりを重視する。また、『総合的な学習の時間』においては、教科等の枠を超え
た横断的・総合的な学習、探究的な活動を行うことをより明確にする。」としている。

また、同答申では、学校教育法改正を踏まえて、学力の三つの要素を、①基礎的・基本
的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・
表現力等、③学習意欲、とした上で、高校教育については、「各教科・科目における知識・
技能を活用する学習活動を充実することになっているが、それぞれの教科の内容は盛りだく
さんであり、すべての内容をフォローできていないという実態もあると聞く。各教科でど
のような項目が必須で教えられないといけないのか明確にし、各高校において、そのための十
分な授業時間を確保するといった、教育と指導の実施についての体制整備をしないと、卒業
段階で必要とされる基礎学力が保証されないという懸念が残る。」としている。

そのような状況の下で現在、東京都教育委員会では、都立高等学校の生徒の「確かな学力」
の向上に向けて、「都立高等学校学力向上開拓推進事業」を実施している。高校入試や各学校
で実施する学力調査等のデータ分析に基づき、生徒の学力の実態を把握し、到達目標等を定
めた「学力向上推進プラン」を作成・改善していくサイクルの中で、授業改善や生徒の学力
の向上を図る目的で、各学校が①基礎的・基本的な知識及び技能、②思考力・判断力・表現
力、その他の能力、③主体学習に取り組む態度、という項目で到達目標を定めて推進プラン
を進行している。

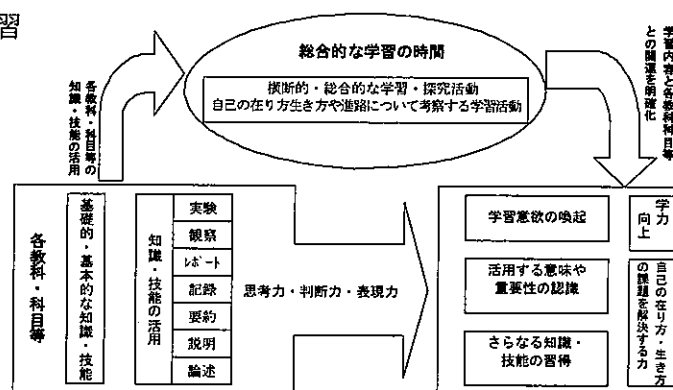
各学校では学力向上のために、それぞれの教科で教科指導や授業研究を行っているが、教
科の枠を超えた総合的な生徒の思考力・判断力・表現力を高めたり、主体的に学習に取り
組む態度を育成したりするためには、各教科で身に付けた知識・技能を相互に関連付け、現実
の生活に関わる学習や自己の在り方についての課題を生徒が自ら学んでいくことが重要であ
る。そのためには、学力向上推進プランに基づき、授業改善等に取り組む際は「総合的な学
習の時間」の学習内容と各教科・科目との関連を明確にして行うことが重要である。

本部会では、「総合的な学習の時間」と各教科・科目の知識・技能等を連携させることによ

って生徒の学習意欲を向上させ、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や態度が育成されると考える。各教科・科目で得られた基礎的・基本的な知識・技能を活用して、「総合的な学習の時間」において横断的・総合的な学習や探究的な活動を行うことによって思考力・判断力・表現力を高めさせる。その結果得られた知識・技能をさらに各教科・科目に関連付けることによって、各教科・科目の学習意欲を向上させる。このことにより、生徒が教科・科目に関心を抱き、その学習結果が現実社会の諸問題等の課題を解決する力となり、併せて生徒の学力向上が図られ、学力向上推進の一翼を担うものとする。

以上のことから、本部会においては、次のような仮説を立てた。

まず、「総合的な学習の時間」の学習内容が、どの教科の学習内容と関連するのかを情報収集や探究活動の中で明確にしたり、課題解決に必要な各教科等の知識・技能を明確にしたりする。その上で関連付けた学習内容を取り込みながら、課題を見付け、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や態度を育む総合的・横断的な学習や探究的な活動を行うことにより、思考力・判断力・表現力を高めることができる。さらに「総合的な学習の時間」で身に付けた資質や能力及び態度を各教科等の学習に生かしていくことにより、各教科等の更に必要な知識・技能の習得、活用する意味や重要性を認識させたり、学習意欲を喚起させたりすることができ、学力向上を図ることができる。



IV 研究の方法

具体的な研究は、次の二つの方法で思考力・判断力・表現力を高める「総合的な学習の時間」の指導の在り方を明らかにする。

まず、各学校の考える思考力・判断力・表現力を学力向上推進プランから分析し、各学校の思考力・判断力・表現力の傾向を明らかにすることにより、本部会が定義した思考力・判断力・表現力に具体性をもたせる。

次に、「総合的な学習の時間」の様々な場面において各教科等の知識・技能を関連付けながら学習をさせる。その際、次のような授業展開の方策を提示し検証する。

- 1 「総合的な学習の時間」の単元全体の中で常に教科等の知識・技能を関連付けながら学習する方法。具体的には、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え（思考力）、主体的に判断し（判断力）、よりよく課題を解決する資質や態度（表現力）を育む上で、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の各学習プロセスにおいて、各教科等で身に付けた知識・技能を関連付けさせ、思考力・判断力・表現力を高めさせる。
- 2 様々な「総合的な学習の時間」のそれぞれの単元内容に、まとめの段階で1単位時間の

学習活動を加えることによって各教科等の内容を関連付け、思考力・判断力・表現力を高めさせる。

V 研究の内容

1 研究構想

全体テーマ **新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ **思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究**

教科等における「思考力・判断力・表現力」の定義

思考力…自ら探究し設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的に考える力。

判断力…課題解決に向けて、多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用する力

表現力…選択した解決方法を基に、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力

各教科における「思考力・判断力・表現力」の育成の現状と課題

現状…各教科等で学んだことを活用して、自らの在り方生き方に関しての課題を解決することができていない。

課題…各教科等における基礎的・基本的な学習内容が「総合的な学習の時間」に総合的・横断的に活用されていないため課題解決につなげる必要がある。

- ① 解決方法を創意工夫する段階において各教科等で学んだ内容・経験を生かす必要がある。
- ② 多様な情報を正確に理解する段階において各教科等で学んだ内容・経験を生かす必要がある。
- ③ 解決方法を自らの意図や考えを他者に伝えるなどする段階において各教科等で学んだ内容・経験を生かす必要がある。

「総合的な学習の時間」部会主題

思考力・判断力・表現力を高める「総合的な学習の時間」における指導の工夫
～各教科等で学んだ基礎的・基本的な知識・技能の活用を通して～

仮説

課題解決に必要な各教科等の知識・技能を明確にした上で、総合的・横断的な学習をすることにより思考力・判断力・表現力が高められる。さらに「総合的な学習の時間」で身に付けた資質や能力及び態度を各教科等の学習に生かすことで、必要な知識・技能の習得・活用する意味や重要性を理解し学習意欲の喚起につながる。

具体的方策

- ① 問題解決に必要な各教科等の知識・技能を明らかにし、関連を図りつつ言語活動の充実を図る活動を実施する。
- ② 探究活動時に、各教科で学習した内容がどのように関連しているか探らせる。
- ③ 各学校の考える思考力・判断力・表現力等の到達目標を基に、本部会が定義した思考力・判断力・表現力に具体性をもたせる。

検証方法

- ① 自己評価カードや教員の評価を通して、思考力・判断力・表現力の向上についてその成果を検証する。
- ② 知識・技能の習得・活用の意味や学習意欲の向上について、「総合的な学習の時間」への取組意識やその変化を自己評価カードなどを利用して調査する。

2 各学校が考える思考力・判断力・表現力の傾向の分析

各学校の考える思考力・判断力・表現力を分析するために、全ての都立高等学校の学力向上推進プランにおける「思考力・判断力・表現力、その他の能力」の到達目標について調査・分析した。

主な内容	全体に対する割合
問題解決・課題解決能力 例「新たな課題や問題に対して、習得した知識・技能を活用して、思考力・判断力を生かして問題を解決する」	69%
根拠をもって説明できる表現力	18%
コミュニケーション能力	10%
進路対応・進路実現力 例「国公立二次試験や難解私立大試験に対応できる力を身に付ける」 「中堅私立大学の一般入試に対応できる力を育成する」 「就職試験等に対応できる力を身に付ける」	28%

思考力・判断力については、69%の学校で、「新たな課題や問題に対して、習得した知識・技能を活用して、思考力・判断力を生かして問題を解決する」ことが目標として定められていた。思考力については「自ら」「論理的に」「柔軟に」考えることとし、判断力については「的確・適正に」判断することが記述されていた。本部会では思考力を「自ら探究し、設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的に考える力」とし、判断力を「自ら課題解決に向けて多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用する力」としている。「自ら・論理的に・柔軟に考えること」は、「自ら探究し、創意工夫しながら意欲的に考えること」に通じ、「的確・適正に判断すること」は「多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用すること」につながる。そして、「問題解決」を到達目標とする点については同じであると考えられる。

表現力については、18%の学校で「根拠をもって説明できる表現力の育成」を挙げ、到達目標として28%の学校で「進路を実現していく力の育成」を挙げていた。また、10%の学校で「コミュニケーション能力の育成」が記述されていた。本部会での表現力は「選択した解決方法を基に、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力」としている。「根拠をもって説明できる表現力」や「コミュニケーション能力」は、「自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりする力」であり、「進路を実現していく力」は「自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力」につながっている。

以上のことから、各学校の考える「思考力・判断力・表現力、その他の能力」の最終的な到達目標は、「進路を実現していく力」となっていることが多く、「総合的な学習の時間」の目標は、「自己の在り方生き方の課題を解決する力」であるから、各教科で身に付ける力と「総合的な学習の時間」で身に付ける力がつながると考える。

3 授業実践による検証

研究仮説を検証するために、検証授業（実践事例Ⅰ、実践事例Ⅱ）を行った。

実践における評価の観点の設定に当たっては、平成22年3月の中央教育審議会初等中等

教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」において、「新しい学習指導要領では、「総合的な学習の時間」の目標に沿って育てようとする資質や能力の視点等を例示しており、このような視点に配慮して各学校において評価の観点を定めることも考えられる」としていることや、学習指導要領解説「総合的な学習の時間」編で、「各学校が定めた目標及び内容を踏まえて、生徒にどのような力がどの程度身に付いたのかを明確にするためにも、適切な評価をすることが必要」であり、「各学校で適切に観点を定め、これに基づいて生徒の学習状況をよりよく改善するものであることに十分配慮しなければならない」としていることを踏まえて実践事例ごとに設定することとした。

本報告書における各実践事例においては、平成22年5月の文部科学省初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」に示された、小中学校の三つの観点例に準用し、学習活動の内容を踏まえてそれぞれ観点を設定した。

4 実践事例Ⅰ

科目名	総合的な学習の時間	学年	1学年
-----	-----------	----	-----

(1) 単元(題材)名・教材名

ア 単元名

「だれにも暮らしやすい社会」を目指して

(2) 単元(題材)の指導目標

ア 本研究に関わる指導目標

(ア) 暮らしの中にある日常的な課題を見付け、よりよく問題を解決するために必要な知識や技能について、各教科等と関連付けさせる。

(イ) 実社会の問題と各教科等との関連性から、必要な知識・技能の習得や活用をする意味を知り、学ぶ意欲を向上させる。

(ウ) 自分の考えや意見などを文章にしたり、説明したりして、伝え合うなどの言語活動を行い、より発展的な課題解決を行う。

イ 指導目標設定の理由

本実践事例では、「総合的な学習の時間」の単元全体の中で各教科等の知識・技能を関連付けながら学習する方法を通して、本部会の設定した研究について検証をする。具体的には、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え(思考力)、主体的に判断し(判断力)、よりよく問題を解決する資質や態度(表現力)を育む各学習段階において、各教科等で身に付けた知識・技能を関連付けさせ、思考力・判断力・表現力を高めさせる方法とする。

(ア) 「総合的な学習の時間」で、課題解決的な学習や総合化を図る学習、探究的な活動の課題を設定する。

(イ) 与えられた課題解決に必要な各教科等の知識・技能を明らかにする。

(ウ) 課題解決に必要な各教科等の知識・技能を関連させ、分析したことを文章に書き表した

り、説明、論述したりして言語活動の充実を図る。

(エ) 探究的な活動を行う各段階で、各教科等で学習した内容がどのように関連しているかを探らせる。

(オ) 自己の考えや発見などが、より発展的に深化・統合する中で、学ぶ意欲が向上していくのを実感させるために、自己学習カードを作成させ、生徒に毎時の学習活動を振り返らせる。

(3) 評価規準

ア 本研究に関わる評価規準

	ア 課題設定の力	イ 情報収集の力	ウ 将来展望の力	エ 社会参画の力
単元の評価の規準	自ら設定した「だれにも暮らしやすい社会」に必要な課題について、解決方法を論理的に考える。	①知識・技能を習得・活用する意味を理解し、意欲的に学習をしようとしている。 ②探究活動に必要な情報を適切な方法で収集し、各教科等の学習内容と関連付けられる。	①言語活動を通して、自分の考えや発見を発展させ、自らの在り方生き方についてよりよく解決する。 ②言語活動を通して、課題を分析・評価して、文章化したり、説明をしたりする。 ③各教科等の知識・技能を習得・活用する意味を理解している。	①「暮らしの中にある日常的な課題」に関心をもち、意欲的に課題解決をしようとしている。 ②自ら設定した「だれにも暮らしやすい社会」の実現に必要な知識や技能を理解している。

イ 評価の観点の設定の理由

本単元においては、「課題設定の力」(学習方法)、「情報収集の力」(学習方法)、「将来展望の力」(自分自身)、「社会参画の力」(他者や社会との関わり)を評価の観点とした。これは、学習指導要領に示された「学習方法に関すること」、「自分自身に関わること」「他者や社会との関わりに関すること」等の視点に沿って、各学校で定めた「育てようとする資質や能力及び態度」を踏まえた観点である。

(4) 単元(題材)の指導計画(5時間扱い)

時間	学習内容	学習活動	評価規準と評価方法
1	障害者や高齢者、目標を達成したい人、など様々な立場の人を想像して、図書館の本や雑誌等の文献やサイトから調査し、社会の現状や生活の中にある課題や問題を明らかにする。	①「だれにも暮らしやすい社会」を実現する上での社会や生活の中の課題や問題(以下「課題や問題」とする。)を挙げる。 ②「課題や問題」を解決するために必要なアイデアを考える。 ③考えたアイデアを実行するために必要な教科等の知識・能力を記す。また出典も個人研究用ワークシートに記す。	ア エ① ・「アイデア編」の記入内容から取組について評価する。 ・取組の中での活動の様子から観察にて評価する。

2	<p>「だれにも暮らしやすい社会」の実現に必要なアイデアをグループ内で出し合い、協議することで、主体的に考え、判断して、協同してよりよく問題を解決しようとする。</p>	<p>①個人で取り上げた「課題や問題」からグループ内で協議を行い五つ程度に絞る。 ②絞られた「課題や問題」を解決するために必要な各教科等の知識・技能を各自の個人研究用のワークシートからアイデアシートに転記する。 ③グループ内で課題解決のアイデアについて意見を出し合う中で、新たな発見や発想を得て、アイデアシートに書き加える。 ④自己の取組について、自己学習カードにまとめる。</p>	<p>ア ウ① ウ②</p>	<p>・「アイデアシート」を作成する取組の中で、活動の様子から観察にて評価する。 ・「自己学習カード」から、グループ内での発言や取組について分析・評価する。</p>
3 (本時)	<p>「課題や問題」を解決するために必要な「知識・技能」と各教科等との関連に気づき、学ぶ意味について考える。</p>	<p>①グループ内で本校の年間授業計画を分担して読み合い、授業における各教科等の知識・技能の内容を把握する。 ②「課題や問題」を解決するために必要な知識・技能に対する各教科等の学習内容を挙げる。 ③「総合的な学習の時間」と各教科等との関連を理解する。 ④自己の取組について、自己学習カードにまとめる。</p>	<p>イ① イ② エ② ウ③</p>	<p>・「アイデアシート」に記入されている問題解決に必要な知識・技能を各教科等の内容と対応させている様子から評価する。 ・「自己学習カード」から、「総合的な学習の時間」と各教科等の関連に気づき、各教科等を学ぶことに意欲的になっているかを評価する。</p>
4	<p>これまでの学習に基づいて「だれにも暮らしやすい社会」の実現について、自分の意見や考えをまとめる。</p>	<p>①「だれにも暮らしやすい社会の実現には」という課題で小論文を書く。 ②「だれにも暮らしやすい社会の実現には」についての小論文に基づいてA4版の概要版ポスターを作成する。</p>	<p>ウ② エ②</p>	<p>・「小論文」の内容から評価をする。 ・「概要版ポスター」の作成状況から評価をする。</p>
5	<p>「だれにも暮らしやすい社会」について、これまでの学習の成果を発表し、自他の評価を踏まえて発展的な自分の意見や考えをまとめる。</p>	<p>①概要版ポスターを基に、自分の考えや発見などをグループ内で説明する。 ②発表された内容について、自己評価や他者評価を踏まえて自分の考えや意見を発展・深化させる。 ③本単元の学習活動から各教科等を学ぶ意義を踏まえた自らの在り方生き方について考える。 ④自己の取組について、自己学習カードにまとめる。</p>	<p>ウ①</p>	<p>・「自己学習カード」から学習成果の発展状況について読み取り、評価をする。 ・「自己学習カード」から学ぶ意味の理解や学ぶ意欲の向上について評価する。</p>

(5) 本時の指導案（全5時間中の3時間目）

ア 本時の内容 「各教科等で「学ぶ意味」について考える」

イ 本時のねらい

- (ア) 「総合的な学習の時間」と「各教科等」との関連について気付く。
- (イ) 各教科等を学習する意味について考え、該当する各教科等の取組に意欲をもたせる。
- (ウ) 実社会の課題が教科等の横断的、総合的な課題であることに気付く。

エ 本時の展開

過程	時間	学習活動・学習内容	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	10分	前時の振り返り ・「だれにも暮らしやすい社会」の実現に必要なアイデアに挙げたものを確認する。 ・複数挙がっている解決策のアイデアの他に別のアイデアがないか再度出し合う。	・実社会での多くの課題が、一つだけの方法では解決に至らないことに気付かせる。	
展開	30分	解決に必要なアイデアを、どの教科等で学習しているか考える。 ・グループで協同的に活動する。 ・生徒が分担して各教科のシラバスを読み、学習目標の到達確認や指導上の留意点を確認する。 ・各課題の解決に必要なアイデアが知識・技能として身に付けられる各教科等の「教科・科目名」、「学習内容」、「指導上の留意点」をアイデアシートに記入する。 ・記入したアイデアシートをグループ内で見せ合い、解決に必要なアイデアについてもれなく調べる。 ・アイデアシートを完成させ、発表をする。	・「総合的な学習の時間」での学習と「各教科等」との内容が関連していることに気付かせる。 ・実社会と教科等との関連性について気付かせる。 ・教科に合致しないところは、学校の教科外で学習していないか照合させ、「学校行事」「部活」「道徳」などを記入させる。	ア① アイデアシートへの記入・机間指導
まとめ	10分	・本日、気が付いたこと、分かったことを自己学習カードに記入する。 ・アンケートを記入する。	・気付いたこと、分かったことを箇条書きで具体的に記入させる。また、教科等との関連について意識させ、該当する各教科等の取組に意欲をもたせる。	イ① 自己学習カードへの記入、アンケートの記入

(6) 結果と考察

ア 結果

(ア) 教科との関連について

本研究授業の事前アンケート、事後アンケートのどちらの段階でも全ての生徒が、「総合的な学習の時間」と何らかの教科等との関連性を意識していることが分かった。本学習活動を実施する前の「総合的な学習の時間」と関連すると考えられる教科数は、一人当たりの平均教科数が5.8教科であったが、事後においては一人当たり平均8.8教科に増加し、生徒が「総合的な学習の時間」と教科等との関連について、本単元を通してより幅広く意識できるようになったことが分かった。学習活動前後での教科数の変化が最も多い例では5教科から13

教科に増えた例で2件あった。

教科数の増減を表1、生徒個別の増減については表2で示す。

表1

教科名	事前(個)	事後(個)	増減数
国語	20(76.9%)	20(69.0%)	-7.9
数学	15(57.7%)	19(65.5%)	7.8
英語	15(57.7%)	17(65.4%)	7.7
理科	7(26.9%)	20(69.0%)	42.1
社会	16(61.5%)	27(93.1%)	31.6
音楽	8(30.8%)	14(48.3%)	17.5
美術	5(19.2%)	16(55.2%)	36.0
体育	17(65.4%)	21(72.4%)	7.0
保健	9(34.6%)	19(65.5%)	30.9
情報	8(30.8%)	20(69.0%)	48.2
家庭	15(57.7%)	24(82.8%)	25.1
技術	6(23.1%)	16(55.2%)	32.1
総合的な学習の時間	10(38.5%)	23(79.3%)	40.8
合計	151 (一人当たり5.8)	256 (一人当たり8.8)	
出席数	26	29	

表2

増加数	人数
増加した生徒	14
変化なし	3
減少した生徒	6

※「変化なし」の生徒のうち2名は事前、事後のアンケートですべての教科に必要と回答している。

最も増加数が多かった教科は「情報」で48.2%増加している。次に「理科」の42.1%と続く。問題解決に向けて、多様な情報を得ることの重要性や、得た情報を分析・評価する段階で、事実を正確に理解、把握するために、ワークシートの結果からも論理的な思考の必要性を感じた生徒が多かったからではないかと分析した。

また、「総合的な学習の時間」が40.8%と高くなったのは、解決方法の中に「ルールを守る」や「マナーの徹底」などこれまでの「総合的な学習の時間」の取り上げてきた学習内容が含まれていたため上昇したと考えられる。

その中で、「国語」だけが事前アンケートから事後アンケートに向けて必要性を感じる生徒数が割合として減少しているが、これは他の教科の必要性が認識されたため、相対的な必要度が下がったためではないかと考えられる。

ワークシートの回答によると特に「問題解決する段階」では、教科等が関連していることに生徒の86.2%が気付くことができたことと回答していることから、本単元を通して「総合的な学習の時間」と教科等との関連について意識できたと言える。

(イ) 生徒の感想を基にした結果分析

① 教科との関連について

事後アンケートから見られた意見には、「この教科にどんな意味があるのか考えた。」や「各教科の目的を見付けて考えていきたい。」など個々の教科を学ぶ意味について考える姿勢が見られた。さらに「数学が苦手なので基礎を身に付けたいです。」と記述する生徒もい

た。また、「学んでいる教科が他の教科にどうつながっているかを考えて勉強したいです。」と教科同士の関連についても意識している生徒もおり、関連付けした学習の効果を見ることができた。

② 学習への意欲の変化について

事後アンケートから見られた意見には、「意欲的に学習すること」、「何事にも真剣に授業を受けようと思った。」、「全教科真剣に取り組む。」が挙がり、より積極的に学ぶことや授業に臨む姿勢が変わってきたことを把握することができた。「嫌な教科もしっかり先生の話聞く」や「やる気がなさすぎたので、まずやる気を出したいと思いました。」など苦手な科目にも取り組もうとする姿勢や自分を振り返った記述も見られた。さらに将来のことを踏まえた「将来のことを考えながら勉強しようと思う。」という意見もあり、今後の学習への取組について意見を述べた生徒もいた。

(ウ) 言語活動の充実について

活動当初は、問題解決のために必要なアイデアを考える学習活動について、個人による活動を中心に行っていた時には 38.5% に上る生徒に「できない」、「全くできない」など否定的な意見が見られたが、グループ活動による話し合いを通して、否定的な意見は 10.4% まで低下した。

また、論理的な思考についても、グループ活動前は 42.3% の「できない」、「全くできない」など否定的な意見が多く見られたが、グループ活動による話し合いを通して、否定的な意見は 12.5% まで低下した。

言語活動を効果的に取り入れることで、生徒の言語活動を充実することができ、授業の中では、「話し合いができて楽しい。」「考えたことのない意見を友達が教えてくれた。」などの声が出て、話し合いの効果を実感することができていた。また、事後アンケートでは、「いろいろな人と話をすることを心掛ける。」「いろいろと発言することが大切だと思った。」「人の話を聞く。」などが挙がり、言語活動を充実させることで「違う視点で考える」ことにつながり、充実した学習を展開することができた。

アイデアシート	グループ				NO.
	種類設定	解決に必要なキーワード・解決策	【教科・科目名】	【学習内容】	
いろいろな生活上の問題、社会問題、地域で起っている					

図1 グループ活動で活用したアイデアシート

イ 考察

(ア) 「思考力」については、1 時限目の自ら設定した課題を探究し、解決方法を創意工夫しながら考える段階から、2 時限目のグループで解決方法を創意工夫しながら考える段階を経る中で、問題解決のための必要なアイデアを論理的に考えることができた実感している生徒が多くなった。また、「学習活動に意欲的に参加した」と回答している生徒の割合も、グループ活動を行うことで高まり、意欲的に考えている生徒の姿を見取ることができた。

本部会で設定した「思考力」である「自ら探究し設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的に考える力」は高まったと考える。

(イ) 「判断力」については、教科等が「総合的な学習の時間」とどのような関連があるか、また問題解決のためにどの教科等が必要かという点で生徒に判断力が問われる場面があった。結果、事前アンケートの段階から全ての生徒が各教科等の学習を必要と認識していたが、グループ活動による話し合いを通して、より幅広い教科等について、「総合的な学習の時間」との関連性や教科等の必要性を認識することができた。また、生徒はアイデアの分析・評価を行うに当たって、各教科等の観点をもって、事実を正確に理解しようとし、よりよい解決方法を選択・採用することができた。

本部会で設定した「判断力」である「課題解決に向けて、多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用する力」は高まったと考える。

(ウ) 「表現力」については、グループ内での話し合いの活動や、シラバスの調べ学習等の協同活動を通してまとめられた内容を小論文作り、概要版のポスター作り、ポスター発表の活動を通して、高めることができたと考えられる。また、ポスター発表後の自己の事後評価の中にはこの学習で得たこととして、「相手の気持ちを考えること」「法を守ること」「思いやりの心をもつこと」「マナーを考えること」「自分のことだけでなく、皆のことを考える」「たくさんの知識が必要」などの意見が見られ、自己の在り方生き方についての課題についても考えることができていた。

本部会で設定した「表現力」である「選択した解決方法を基に、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力」は高まったと考える。

本部会で設定した「表現力」である「選択した解決方法を基に、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力」は高まったと考える。

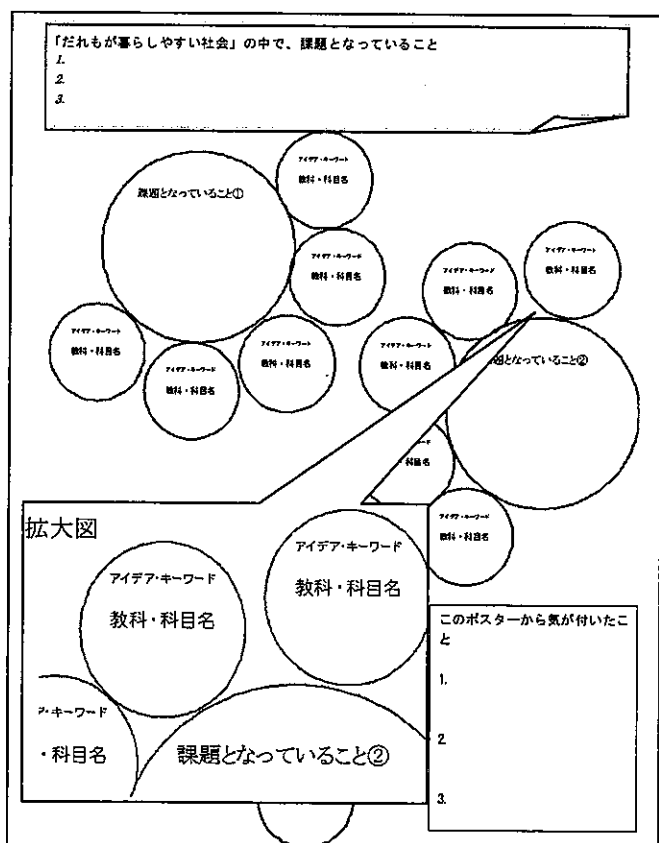


図2 小論文の概要版ポスター用ワークシート

本単元では個人活動による課題設定に加えて、グループ活動を通しての協議、シラバスの調べ学習などの協同作業を行う活動を取り入れた。また、言語によって分析したり、まとめたりできるように小論文や概要版ポスター作成、グループ内のポスター発表などの指導の工夫を行った。これらの活動によって、生徒に学ぶことの意味や学ぶ意欲の向上を図れたと考えられる。さらに自己の考えや発見などが、より発展的に深化・統合し、学ぶ意欲を向上させるために事前アンケートや事後アンケートだけではなく、毎時作成するワークシートで生徒に毎時の学習活動を振り返えらせた。個人の学習とグループの学習を意図的、効果的に用いることで、生徒が学習に対して、興味・関心をもち、意欲的に取り組んでいった姿が確認で

きた。

さらに、学習を通して社会の問題や課題はもともと総合的、横断的に解決が必要なものであることに気付くとともに、課題解決に必要な知識・技能が幅広い教科等に関連していることをシラバス調べ等の中で自觉させることもできた。

5 実践事例Ⅱ

科目名	総合的な学習の時間	学年	3 学年
-----	-----------	----	------

(1) 単元(題材)名・教材名

ア 単元名

「マナー・接遇」(課題研究)

イ 単元設定の理由

高等学校学習指導要領では、「職業教育を主とする専門学科では課題研究等の履修により、『総合的な学習の時間』の履修と同様の成果が期待できる場合においては、課題研究等の履修をもって「総合的な学習の時間」の履修の一部又は全部に替えることができる」とされており、本事例の授業においても課題解決型の学習や教科等を横断的・総合的に学べるものとなっている。また、本実践事例では、「マナー・接遇」の授業として、営業部の秘書という設定で顧客からの問い合わせに対する対応の学習やロールプレイング演習とした学習活動の後に1時間を付け加える形で前時とのつながりと本時1時間の事例の授業となるようにした。

(2) 単元の指導目標

ア 本研究に関わる指導目標

- (ア) 単元のまとめの段階で、各教科等で学習した内容がどのように本単元に関連しているか生徒に調べさせ、考えさせる。
- (イ) 前時までの授業における学習活動で得られた知識・技能やそれに基づいて考えたことと、これまでに学んできた教科等の学習内容との関連付けを行うことにより、学ぶ意欲が向上していくのを実感させる。
- (ウ) 与えられた課題を分析させ、文章に書き表したり、言語活動を行わせる。

イ 指導目標設定の理由

- (ア) 学習活動の結果や振り返りを行うことによって本単元の学習と各教科等における学習の内容と関連付けをさせることができ、各教科等のさらなる必要な知識・技術の習得・活用する意味や重要性を認識させたり、学習意欲を喚起させたり、学力向上を図ることができるため指導目標アを設定した。
- (イ) 課題解決に向けて、多様な情報を分析・評価して、事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採択する力(判断力)を育成することは本部会の目標の一つであるので指導目標イを設定した。
- (ウ) 選択した解決方法をもとに、自らの意図や考えをまとめたり、他者に伝えたりするなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決させる力(表現力)を育成させ

ることは本部会の目標の一つである。言語活動を充実させる活動は各教科等と「総合的な学習の時間」とを結び付け互いに支え合うものになり、生徒の学習意欲の向上につながるため指導目標ウを設定した。

(3) 評価規準

ア 本研究に関わる評価規準

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
単元の評価規準	①学習活動の意図を理解し主体的に取り組んでいる。 ②課題解決にあたって創意工夫しようとしている。 ③自己の在り方生き方について新たな課題発見をしようとする努力をしている。	①自ら探究し設定した課題について解決方法を考えている。 ②選択した解決方法をもとに、言語活動を通して自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決している。	①「総合的な学習の時間」と各教科等の内容の関連を調べることができる。 ②事実を正確に理解するために分析・評価することができる。	①課題についての知識・技術を身に付けている。 ②課題の意義について理解を深めている。

イ 評価の観点の設定理由

本実践事例では、1単位時間の授業で教科との関連付けをより明確に意識した学習活動として、評価を行うことができるよう、各教科等の評価の観点との関連を明確にした観点として「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の四つの観点を設定した。

評価規準の四つの観点を設定するに当たっては、本研究部会の主題を踏まえ、思考力・判断力・表現力の三つの力の育成に合わせた学習活動を通して四つの観点を整理し、設定した。

(4) 単元（題材）の指導計画（+1時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準と評価方法
学習 顧客 レイ ング の ロー	・「営業部の秘書という設定で顧客からの問い合わせに対する対応」（3時間）の学習活動の末尾でこの学習に生かせる教科を考える。	・ロールプレイング学習で学んだことと、各教科等との関連について、考えさせる自己学習を行う。 ・各教科の年間授業計画を参照し、関連を確認する。	ア① イ① イ② ウ① ウ② エ① エ②
+1 本 時	・前時までに学んだ内容と教科等との関連を個人で考える。 ・グループ内で協同して話し合い、発表する。 ・学習前後の考え方の変化を振り返り、学ぶ意味について考える。	・どの教科等をどの程度勉強すればよかったのか、またどの教科等の学習が生かされたのかを考えて、個人振り返りシートに記入する。 ・グループで話し合い、発表用ワークシートに記入する。記入後グループで発表する。 ・事前ワークシートを確認することで新たに気が付いたことなどを個人用振り返りシートに記入する。	

(5) 本時の指導案

ア 本時の内容 「学んだことを関連付けよう」

イ 本時の目標

(ア) 前時までに学んだことを、各教科等との関連付けをさせる。

(イ) 関連付けたことについて生徒相互に話し合わせる。

(ウ) 学習前後の自分の考え方の変化を基に今後の学習への取組や学ぶ意味について考えさせる。

ウ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準と方法
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> 前時までに学んだ内容と教科との関連をグループ内で話し合い、発表用振り返りワークシートに記入する。 年間授業計画を参照し、前時までに学んだ内容と各教科等との関連を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分ができたこと、できなかったこと、どの教科が生かされたかを記入させる。 どの教科のどの部分を勉強しておけばよかったかを生徒に気付かせ、教科との関連を考えさせる。 	ア① イ② ウ① 課題について意欲的に取り組んでいる。 <u>制作物による評価</u> 振り返りワークシートの「どの教科が生かされたのか」の記述を見る。 <u>観察による評価</u> 机間指導・観察 関連付けに悩む生徒がいたら助言・指導する。
展開	30分	ワークシートの各項目について各グループ討論する。「学習に生かした教科」「学習しておけばよかった教科」等の項目についてグループ内の意見をまとめて発表する。	<ul style="list-style-type: none"> 教科等に関連付けたことについて話し合いをさせる。 発表させる際には(グループ3分程度)他者に発表者の意見を傾聴させる。 	イ① イ② ウ① ウ② エ① エ② <u>観察による評価</u> 他者と協同し、課題を的確にまとめ、解決方法を分析し、話し合いをしている。 <u>観察による評価</u> 発表者の意見を傾聴している。 観察
まとめ	10分	学習した単元の内容と教科等の関連について再度考え学習前と学習後の自己の考え方の変化について振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> 単元学習前に記入させた事前ワークシートと学習後の振り返りワークシートとを比較させ自己の考え方の変化に気付かせ、振り返りをさせる。新しい発見があれば振り返りワークシートに記入させる。 	イ① イ② ウ① ウ② エ① エ② <u>制作物による評価</u> 振り返りワークシートの内容1から4まで「うまくできたこと」「できなかったこと」「学習に生かした教科」「学習しておけばよかった教科」の部分の記述を見る。 <u>観察による評価</u> 机間指導・観察

(6) 結果と考察

ア 結果

本時の前に事前ワークシートでは次の項目について記入させた。

- 1 あなたは、このマナーの学習をする際に今まで学んできた教科等が関連していると思いますか。思う教科等に丸印を付けなさい。(全15教科)
- 2 あなたはこのマナーの学習の中でどの場面でどの教科等のどの部分が生かせると思いますか。

例：電話の応対での場面で国語の敬語の勉強

例：アメリカ人との応対で英語の会話の勉強

例：電話の応対で公民の法律を（製造物責任法）の勉強

場面	教科	内容

また、本時の学習活動のまとめで、次の項目について記入させ、振り返りを行わせた。

- 1 あなたは、このマナーの学習をする際に今まで学んできた教科等が関連していると思いますか。思う教科等に丸印を付けなさい。(全15教科)
- 2 あなたはこの学習の中で自分がうまくできたことは何ですか。具体的に答えなさい。
例：グループの人たちと積極的に話し合えた。他人の意見を良く聞いた。
- 3 あなたは学習の中で自分がうまくできなかったことは何ですか。具体的に答えなさい。
例：発表で声が小さくなってしまった。
- 4 あなたはどの場面でどの教科等のどの部分が生かせたと思いますか。

例：電話の応対での場面で国語の敬語を勉強していて良かった。

例：アメリカ人との応対で英語の会話を勉強して良かった。

例：顧客の対応で公民の法律を勉強していて良かった。

場面	教科	内容

- 5 あなたはどの場面でどの教科等のどの部分を勉強していれば良かったと思いますか。
例：商品金額に関する問い合わせの件で数学の割合の計算を勉強しておけば良かった。
例：電話で県庁所在地を聞かれ社会科の地理を勉強しておけば良かった。
例：商品の布地に関する問い合わせに対して家庭科の取扱いマークを勉強しておけば良かった。

場面	教科	内容

- 6 あなたはこれからより各教科等の学習を深めていかなければならないと思いますか。
- 7 あなたはグループの人たちと協力して作業できたと思いますか。

生徒が記入したものの結果と分析を以下に記述していく。

(ア) 数値的結果から見た「教科等との関連」

ワークシートの質問1では、今回の「総合的な学習の時間」において関連すると思う教科等に丸を付けさせた。その結果、学習前は一人当たりの関連すると思う教科数の平均が3.2教科であったが、学習後は一人当たり平均5.9教科に増加した。生徒個々の変化に着目して分析すると、最も多い例では3個から15個に増えた例が2件あった。また、事後において教科数が減少した生徒はいなかった。教科等の事前から事後への増加数および人数は下記のとおりである。

教科等		事前 (個)	事後 (個)
国語		15	17
地理歴史		0	4
公民		4	5
数学		0	4
理科		0	2
外国語		7	9
保健体育		0	3
芸術		0	3
家庭		3	5
情報		1	5
商業	簿記	0	4
	マーケティング	3	10
	総合実践	11	14
	経済活動と法	3	9
	選択科目等 (秘書他)	7	7
合計		54	101
出席数		17	17

出席生徒	増加数
生徒 A	3→15 (12 増)
生徒 B	3→15 (12 増)
生徒 C	4→10 (6 増)
生徒 D	5→9 (4 増)

増加数	人数
15～13	0
12～10	2
9～7	1
6～4	3
3～1	5
0	6
出席人数	17

また、ワークシートの質問4では「どの教科等のどの部分が生かされたか」として、一番記入が多かった教科は「総合実践」であり、47%の生徒が挙げている。続いて多かった教科は「秘書」であり、24%の生徒が挙げている。台本の内容が商業的内容のグループが多かったため、多くの生徒が商業科の科目との関連を認識している。

また、ワークシートの質問5では「どの教科等を学習していれば良かったか」として、一番多かった教科は「国語」であり53%の生徒が挙げている。この結果は、半数以上の生徒が学習活動における言語活動の必要性を認識している。

(イ) 数値的結果から見た「学習への意欲」

事前ワークシート記入時には「生かせると思う教科等」に何も記述できなかった生徒が4人いた。そのうちの二人は学習後において、振り返りワークシートの質問4で「どの教科のどの部分が生かされたか」として複数の教科等との関連付けができて、振り返りワークシート

に記述することができた。実際に演習して学習が深められ、教科との関連付けや教科を生かせる具体的な場面をイメージすることができたと言える。

また、ワークシートの質問6では「あなたはこれから、より各教科等の学習を深めていかなければならないと思いますか。」で「思う」と答えた生徒は88%であった。今後の学習活動への意欲が見られる。さらに、ワークシートの質問7では「グループの人たちと協力して作業できたと思うか。」で「思う」と答えた生徒は100%であった。全員が他者と協同して、学習活動に取り組んでいる。

(ウ) 生徒の感想から見た「教科との関連」

ワークシートの質問5では「どの教科等を学習していれば良かったか」として、「顧客の対応で国語の謙譲語と尊敬語を勉強していれば良かった。」「台本を作るときに国語で文章を考える力を付けておけば良かった。」「『経済活動と法』の授業でトラブルに巻き込まれたときの法律の勉強をしていて良かった。」「『総合実践』で電話の対応を学習していたので言葉遣いがうまくなった。」「『秘書』を勉強しているいろいろな場面で敬語と挨拶が身に付いていた。」などと記述している。生徒が各教科等の学習を自分たちの学習活動と関連付ける必要性を認識している。

また、感想では「事前ワークシートでは関連していると思う教科等を三つしか丸をしていなかったのに、今回は全ての教科等に丸を付けていた。自分の中で考え方が変わったのだと思いました。」などと述べているものもあった。学習前後で自分の考え方が大きく変化していることを認識し、教科等の学習の基礎的・基本的内容の習得の必要性を得ている。

(エ) 生徒の感想から見た「学習への意欲」

ワークシートの質問6と質問8は学習への意欲に関連している。生徒が記述した感想は「計画性をもって次も頑張りたい。」「もっと勉強していきたい。」「学習したことをもっと良い方向に向けられれば良いと思います。」「今後に生かしていきたいです。」と今後の学習への意欲を述べている。

(オ) 生徒の感想から見た「言語活動の充実」

ワークシートの質問2では「自分たちがうまくなったこと」として、「最初から最後までグループの人と話し合っこの授業を終わることができた。また、お互いに沢山の意見を交換することができたので、良いものができたと思っている。」「積極的に話し合うことができたため、発表に向けて敬語やどのように話したら伝わりやすいかを考えることができて良かった。また、発表の時に声の大きさを心掛けることができて良かった。」と述べている。

また、ワークシートの質問3では「うまくなかったこと」として、「台本を書くにあたって尊敬語や謙譲語を考えるのが大変だった。」「台本作成のときに文章力を付けていけば良い。」「電話の対応のときに緊張して声が小さくなってしまった。」「発表のときに声が小さくなってしまった。」「台本が短くすぐに終わってしまった。」「日本語のつなげかたを勉強する。」などと述べている。

これらのワークシートの質問2と質問3はまさに言語活動を充実させることと関連している。各グループで内容を話し合わせたり、発表させたりすることで言語活動の充実が図られたことになる。

イ 考察

- (ア) 「思考力」については、質問1と質問4と質問5でなぜこの教科等が必要かを考えさせている。生徒の一人一人の記述を見ると事前ではどの場面でのどの教科が生かせるのか想像できず全く記入できなかつた生徒が学習後では具体的な場面を記入できるようになった。学習内容が深められ、自ら探究し、設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的に考える思考力が高まっていると考えられる。
- (イ) 「判断力」については、質問1と質問4と質問5ではどの教科が「生かされたか」「必要か」「学習していればよかつたか」という判断力が問われている。この学習により、教科、場面、必要な知識、各教科等の内容の必要性を判断している。全員の生徒が各教科等の勉強が必要であると意見を述べており、よりよい課題解決方法に向けて選択採用する判断力が高まっていると考えられる。
- (ウ) 「表現力」については、質問2と質問3では、「自分がうまくできたこと」「自分がうまくできなかったこと」として言語活動を挙げている生徒が多い。発表させ、ワークシートにまとめさせる学習活動で、自らの意図や考えをまとめたり、他者へ伝えたりするなどの表現力が高まっていると考えられる。
- (エ) 言語活動については、各グループで内容を発表させ、総括させることで充実を図ることができた。

単元の学習と教科等の基礎的・基本的な学習との関連付けのための末尾に1時間付け加えた学習活動で、各教科等で学習した知識・技能との関連を意識させ、自分の考えにとどまらず、協同を通して得られた情報をもとに、文章に書き、発表させることで、生徒に各教科等の役割、学ぶ意味を考えさせられた。事前ワークシートと事後の振り返りワークシートを活用し、自己評価をさせることで新たに自分の考えの変化に気付かせることができると考えられる。また、必要とされる各教科等の知識・技能の意識を通して、生徒が教科等の学習に対し、前向きに取り組むように興味・関心が喚起されたかについては、振り返りワークシートの記述により検証できる。

総合的・横断的な内容の学習活動は、多くの教科に関係していることを意識させることが重要である。今回は商業的な内容が多かつたことから、商業科の科目が増えたが、外国人の会話がある内容のグループは関連する教科として英語を示した。このことを見ても各学校の学力向上推進プランでの分析などに基づき、自校の生徒の学習定着が弱い複数の教科等について意図的、計画的に用意すれば、各教科等の勉強を必要と思う生徒が増え、学習意欲を喚起させることができると考えられる。

VI 研究の成果

実践事例Ⅰでは、「総合的な学習の時間」の単元全体の中で常に教科等の知識・技能を関連付けながら学習した結果、必要と思う教科等の数の平均が授業前では5.8だったが、授業後では8.8に上げることができた。全ての教科等で必要だと回答する率が50%を超え、79%の生徒がこの取組を通して、新たに教科等を学ぶ意欲をもったと答えられるようになった。

思考力・判断力の育成については、初めに自ら課題を考え発見させ、それをグループ内での相談やレポートの作成と授業を展開していくことにより、自ら探究し設定した課題について解決方法を創意工夫しながら意欲的に考える思考力や課題解決に向けて多様な情報を分析・評価して事実を正確に理解し、よりよい解決方法を選択・採用する判断力の育成を図ることができた。

表現力の育成については、課題をレポートにまとめたり、発表したりしていくことにより、自らの意図や考えをまとめ、他者に伝えるなどして、自己の在り方生き方についての課題をよりよく解決する力を育成することができた。また、グループでの活動は協同作業を充実させ、レポートを作成し発表するなどの言語活動の充実により、思考力・判断力・表現力の育成につながっている。

検証結果は、毎時間授業終了時にどのようなことができたかを自己学習カードに記入させることにより把握することができた。自己学習カードの結果を基にして、次回以降の授業を改善・充実することも可能になった。

実践事例Ⅱでは、単元のまとめにプラス1時間の授業を用いて、「総合的な学習の時間」と各教科等との関連付けを行ったが、1時間の学習だけでも各教科等への学習意欲を向上させることができた。学習作業中にグループ内で協議し、ワークシートに記述させ発表を行うことによって、思考力・判断力・表現力を高めさせることができた。1時間の中で完結させるためには、ワークシートの活用により、教科等との関連について特化した学習活動を行う時間とすることで「総合的な学習の時間」のどの単元でもプラス1時間で行うことが可能である。さらに短い時間でディスカッションなどの言語活動を取り入れることで、「総合的な学習の時間」と各教科等との関連付け、生徒の学習意欲の向上を図ることができた。

各学校が考える思考力・判断力・表現力の傾向を明らかにするために、全ての都立高等学校の学力向上推進プランにおける「思考力・判断力・表現力、その他の能力」の到達目標について調査した結果、各学校の考える「思考力・判断力・表現力、その他の能力」の最終的な到達目標は、「進路を実現していく力」となっていることが多く、「総合的な学習の時間」の目標は、「自己の在り方生き方の課題を解決する力」であるから、各教科等で身に付ける力と「総合的な学習の時間」で身に付ける力が車の両輪のように機能し合うことにより学力や学習への意欲を高めることができると考えられる。

このことは実践事例Ⅰ、Ⅱで示したとおりであり、「総合的な学習の時間」での学習内容を各教科等に関連付けることによって、各教科・科目に対する生徒の興味・関心が増し、学習意欲が向上する。こうした手法により、生徒が自ら学び自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成する授業を実践することが期待できる。

Ⅶ 今後の課題

今回、各教科等で学んだ基礎的・基本的な知識・技能の活用を通して、思考力・判断力・表現力を高める「総合的な学習の時間」における指導の工夫の研究を行ったが、今後の課題として以下の点を挙げる。

1 指導の在り方の一般化

実践事例Ⅰにおける「総合的な学習の時間」の単元全体の中で常に教科等の知識・技能を関連付けながら学習する方法については、学習過程の中で生徒に教科等の知識・技能を常に意識させるための手法を一般化し、同じ題材でなくてもその手法が使用できる提示の仕方を検討していく必要がある。具体的には、学習活動の中やその前後に教科等との関連を意識させながら学習活動を行うためのアンケートの方法・内容や自己評価の指導の在り方を一般化し、単元内容が異なっても、適切な指導・助言により絶えず教科等との関連を意識させることによって、思考力・判断力・表現力を高めていく必要がある。

2 指導の継続性

実践事例Ⅱにおける「総合的な学習の時間」の単元終了後にそれに関わる各教科等を振り返る学習方法については、単元に関わる教科等の必要性を感じさせたときに、次につなげる指導の在り方を検討する必要がある。具体的には、プラス1時間だけで終わらせないで高まった学習意欲を各教科等の学習にどう還元していくかの指導方法を検討し、教科等と一体となって「総合的な学習の時間」の改善を推進していく必要がある。

3 各学校が目指す学力像の反映

「Ⅴ 研究の内容」の各学校が考える思考力・判断力・表現力の傾向の分析で述べたように、各教科等で身に付ける力と「総合的な学習の時間」で身に付ける力がつながると考えられるが、各学校の学力向上推進プランの思考力・判断力・表現力を高めるために、「総合的な学習の時間」の具体的な学習活動や、各学校で育てたい能力につながる「総合的な学習の時間」の教材など、目指す学力像を反映した教材のバリエーションを検討する必要がある。

「総合的な学習の時間」が、生徒が自ら学習の必要性を感じた教科等との橋渡しをすることによって、生徒の学習意欲を高め、「総合的な学習の時間」の目標である「自己の在り方生き方の課題を解決する力」を各学校の学力向上の目標としている「自己の進路を実現していく力」につなげて、生徒の学力を向上させていく必要がある。

平成23年度 教育研究員名簿

高等学校 ・ 総合的な学習の時間

学校名	課程	職名	氏名
第四商業高等学校	全日制	主任教諭	加藤 由希子
八王子拓真高等学校	定時制	主任教諭	末石 忠史
羽村高等学校	全日制	主幹教諭	○岡田 貴夫

○ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
統括指導主事 藪田 憲正

平成 23 年度

教育研究員研究報告書

高等学校 総合的な学習の時間

東京都教育委員会印刷物登録

平成 23 年度第 181 号

平成 24 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

電話番号 (03) 5320-6836

印刷会社 有限会社 シーダー企画